

巻頭言**施工企画と技術**

村松 敏 光



私たちは、何か事を起こそうとするとき、効率的に、良い結果を得ようとして、その手段や方法について思いをめぐらします。税金という対価を得て国民に提供されるサービスである行政の一部を構成する土木工事などは、機能と同時に、地域のシンボルやランドマークとなる構造物を作るもので、そのマネジメントが重要です。

技術者は、明治以来の近代化の中で、欧米から技術を導入し、わが国の自然に適合させて、近代化の基礎を作る土木技術を磨いてきました。戦後においては、建設機械が大きな役割を果たし、建設の機械化が即ち施工の近代化、合理化でありました。今では、技術と建設機械が渾然、一体となっており、深層混合処理工法に見られるように、施工技術を如何に実現するか、機械を如何に使うかということが重要になってきています。「建設機械」の時代から「施工技術」の時代へと転換したといえます。「建設の機械化」から「建設の施工企画」に名称が変わったことは、この変化を表すものと考えます。

社会資本整備は、現場で行われるもので、現場でのマネジメントが、事業化に至る多くの労苦の成否を担っています。そのマネジメントの中心は、かつての「建設機械を投入すること」から、「土木技術、建設技術を使い、活かすこと」に移っています。新しい技術を使うことによって技術を育成し、新しい技術の開発を促さんとする必要性も、技術が現在のマネジメントを左右し、将来の可能性を保障するからです。

国土交通省は、10年ほど前から新技術情報のデータベース（NETIS）を構築し、4千を超える技術が登録され、直轄工事の14.4%で新技術が使われていま

す（平成16年度）。一方、4年ほど前から、テーマを設定して技術を公募する取り組みを始めましたが、応募される技術の7~8割は、NETISに登録されていない技術です。これらの状況から、かなり荒っぽい類推ではありますが、我国には1万数千から2万件の新技術があるものと推察できます。

新しい発見や発明は、いつも注目を集めますが、すぐに役立つことは少なく、失望の時期を迎えます。そして、「技術」として開発されても、厳しい選別と淘汰を受け、事業化、実用化され、発展していくという大きな流れがあるそうです。

有史以来、人類は、新しい技術を発見し、活用してきました。それぞれの技術は、使われる中で改良され、その性能を高め、人々の生活を便利にし、快適なものにしてきました。土木技術は、社会資本形成になくてもならないものですが、実際に使って評価し、育てるというプロセスは、民間の力だけでは実現しません。

技術を使い、育てていくためには、「こんなことで困っている。」「こんなことをしたい。」といった課題に対して、最新の技術情報や、「技術をつかったらこんなことができました。」という情報を提供し、「そんな技術があるのだったら、こんなことができる。」という形で活躍の場を提供するといった仲人役が必要です。技術者が交流し、技術情報を交換し、互いの技術力を高めていく場も必要です。

そのような役割と同時に、「常に、現場に軸足を置き、現場の技術を担う施工企画」…そんなことを目指して行こうと考えています。